

近江八景詩歌の伝播と受容

鍛 治 宏 介

【要約】 本稿は、江戸時代において近江八景という一つの知識が、刊本や写本という書物を介して社会に伝播し、さまざまな地域・階層の人々に教養として受容されていく過程を、近江八景を詠んだ漢詩と和歌を素材に検討したものである。まず朝廷や五山文化圏で産み出された近江八景詩歌が、堂上歌壇のみならず地下歌壇においても流布していたことを明らかにした。さらに『扶桑名勝詩集』の板元吉田四郎右衛門に注目して、吉田家は書肆を営む一方、院雑色という朝廷の下級役人としての側面も有し、朝廷の知を社会に広げる回路として、近江八景詩歌が刊本世界へ流入する役割を果たしたことを指摘した。それから一八世紀以降の日用教養書における展開に注目し、さまざまな誤謬も内包しつつ、手習教育の教材に利用されるなど、近江八景詩歌の伝播の射程が格段に広まったことを明らかにした。以上の検討を通じて、江戸時代書物文化における知の流通構造の一端を描き出した。

史林 九六巻二号 二〇一三年三月

はじめに

本稿は、江戸時代において、一つの知識が、書物などを介して社会に伝播し、さまざまな地域・階層の人々に教養として受容されていく過程を、近江八景を詠んだ近江八景詩歌を素材に検討するものである。

近江八景とは、周知のごとく、中国の瀟湘八景に擬して定められた琵琶湖南部の八勝景、石山秋月、瀬田夕照、粟津晴嵐、矢橋帰帆、三井晚鐘、唐崎夜雨、堅田落雁、比良暮雪の総称である。近江八景については、文学、歴史学、美術史、

観光学など多様な学術分野において研究が重ねられている。そのなかでも、一九三七年の段階で、文学作品や絵画作品、各種考証類、さらには名所記の類まで、さまざまな性格の史料を博搜して近江八景の展開を示した柴田実氏の先駆的研究^①、中世から近世に至る長いスパンに渡る文芸作品を素材として、瀧湘八景の日本における普及を論じるなかで近江八景の展開についても検討した堀川貴司氏の研究、江戸時代の人々の観光という行動に目を向け、書物における知の普及と関連させながら、地域社会史として近江八景を論じた青柳周一氏の研究、近江八景にまつわるさまざまなジャンルの作品を集め、その伝播の射程の広さを視覚的に示した美術館や博物館における展覧会^④など、貴重な成果を多くあげることができる。

しかし歴史的事実の掘り下げという点で、これらの先行研究にはまだ検討の余地がある。筆者は拙稿「近江八景詩歌の誕生」^⑤（以下、前稿）において、現行の近江八景和歌は、一七世紀初頭、後水尾天皇に和歌の手ほどきをするなど朝廷文化の中心的人物の一人であった近衛信尹が、慶長年間、膳所城よりの眺望を詠み描き、城主戸田氏鉄に与えた「膳所金城之八景」が初出であること、また江戸時代に近江八景歌とともに伝播する近江八景詩は、閑室元佑の弟子として朝鮮への將軍秀忠国書の代筆を行うなど、一七世紀前半の五山において活躍した円光寺二世玉質宗樸が、故あって五畿内追放となり、謫居先の八幡郊外にて詠んだ作品であったことを明らかにした。すなわち、近江八景詩歌とは、朝廷文化、五山文化という、江戸時代初期における最上位の文化階層で活躍した人物により産み出された知であったのである。

本稿では、その知が写本や刊本といった書物を通じて当時の社会に伝播していき、一般教養として定着する過程を明らかにする。特に、その伝播の過程において大きな役割を果たした書肆や、往来物や節用集などの日用教養書といった回路に注目する。具体的には、まず第一章で一七世紀、近江八景詩歌がその誕生後に、堂上公家や地下の歌壇で伝播していく様相を検討する。第二章では、江戸時代中後期の展開に大きな影響を与えた『扶桑名勝詩集』の板元吉田四郎右衛門に注目して、朝廷やその周辺で流布する知が刊本に掲載される過程を検討する。第三章では、一八世紀以降における絵画、芸能、工芸などさまざまなメディアを通じた近江八景の伝播について、特に日用教養書での展開に注目し、さらに手習教育での

受容もみていく。

書物による近江八景という知の伝播に注目するという点で、本稿は青柳氏と関心を同じくするものであるが、青柳氏の研究では、書物それぞれの性格の違いには充分注意が払われていない。また朝廷知の社会的広まりという点では、近年、百人一首の江戸時代における流布の様相が注目されており^⑥、また丹和浩氏により江戸前期の後水尾院サロンの歌人たちの歌が、江戸時代に刊行された往来物附録の七夕記事に掲載されていることが明らかになっている^⑦。しかし百人一首研究では出版物自体の分析が中心であり、往来物に載る知の源泉を指摘したという点で画期的な丹氏の研究も、分析は伝播の両端に偏っている。本稿では、伝播の途中の回路を詳細に検討し、さらに書物の受容も視野におく。

また知の伝播を検討する際、写本という形態の書物に特に注目したい。江戸時代書物文化における写本という形態に関しては、例えば藤實久美子氏が、江戸時代の「知」のありようを「開放系の「知」」「多くの場合に板本として流布した書籍」、「閉鎖系の「知」」「多くの場合に写本として存在し続けた書籍」と分類したように^⑧、主に刊本としては普及できない秘传的な知の媒体とみなされてきた。また書写本制作を行う書本屋や貸本屋の商品としての側面^⑨、さらには学者による知の発信・享受形態^⑩として注目されてきた。本稿では、写本が持つ機能として、刊本に載る知の伝播の射程をさらに広げる媒体としての側面に注目したい。

筆者は以前、江戸時代中後期の社会において、文化資本を多く持たない人びとの知識形成に大きな役割を果たすものとして、重宝記、節用集、往来物などの書物に注目し、日用教養書と名づけた^⑪。本研究は、江戸時代の出版文化の隆盛のなか、江戸時代中後期の出版界における主力商品として大量に出板された日用教養書において、商品価値を高める重要な要素であった附録記事の知的系譜を明らかにすることにもなる。

① 柴田実「近江八景」（滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会編『滋賀県

名勝調査報告』第一冊、滋賀県、一九三七年）。

② 堀川貴司「近世における普及」（堀川『瀟湘八景』臨川書店、二〇

③ 青柳周一「近世旅行史上における近江国」〔交通史研究〕第六一号、

交通史研究会、二〇〇六年。青柳周一「十七・十八世紀における近江八景の展開」〔青柳周一・高埜利彦・西田かほる編「近世の宗教と社会」第一巻、吉川弘文館、二〇〇八年〕。

④ 「特別展 近江八景」滋賀県立近代美術館・京都新聞社、一九八八年。「近江八景」大津市歴史博物館、二〇〇四年。

⑤ 拙稿「近江八景詩歌の誕生」〔京都大学文学部国語学国文学研究室編「国語国文」第八一卷第二号、中央図書出版社、二〇一二年〕。

⑥ 藤田洋治「版本『絵入百人一首』の合刻作品」〔人文科教育研究〕第二二号、人文科教育学会、一九九五年。小泉吉永「女子用往来と百人一首」〔白鷺洋三郎編「百人一首万華鏡」思文閣出版、二〇〇五年〕。

⑦ 丹和浩「往来物」における七夕の歌」〔丹「近世庶民教育と出版文

化」岩田書院、二〇〇五年 初出一九九四年〕。

⑧ 藤實久美子「近世書籍文化研究の沿革と本書の構成」〔藤實「近世書籍文化論」吉川弘文館、二〇〇六年 初出二〇〇〇年〕一三頁。

⑨ 母利司朗「書本屋について」〔東海近世〕第六号、東海近世文学会、一九九三年。藤沢毅「刊写本について」〔広島近世文学研究会編「鯉城往来」第五号、広島大学文学部久保田啓一研究室、二〇〇二年〕。

⑩ 高橋章則「『板本』の「写本」を作るのはなぜか」〔ナオ・デ・ラ・チーナ〕第六号、東北大学東北アジア研究センター内特定領域研究事務局、二〇〇四年。遠藤慶太「勅撰史書の書写と印刷」〔遠藤

平安勅撰史書研究〕皇学館出版部、二〇〇六年 初出二〇〇五年〕。

⑪ 拙稿「江戸時代教養文化のなかの天竺・公家像」〔日本史研究〕第五七一号、日本史研究会、二〇一〇年〕。

第一章 詩歌写本における伝播

一 近江八景歌の伝播

まず慶長年間に近衛信尹が近江八景歌を詠んで以降、詩歌の世界で近江八景がどのように伝えられたのかをみていく。

前稿で明らかにしたように、信尹の近江八景歌（以下、信尹歌）が書き記された最も古い史料は、寛永元年（二六二四）の奥書を持つ藤原惺窩門の儒者菅得庵による記録である。信尹より「膳所金城之八景」の画賛を贈られた膳所城主戸田氏鉄

（元和三年（二六一七）より尼崎藩に転封）に儒学を講じていた得庵は、氏鉄のもとを訪れた際に実見した信尹による近江八景画賛に載る信尹歌を書き写している^①。

柴田実氏は、園城寺円満院が所蔵する信尹自筆と思われる近江八景画賛を紹介しているが、近日中の八景の染筆を約束^②

する円満院門主宛の信尹書状^③が存在しており、おそらくこの時染筆されたものが柴田氏の紹介した近江八景画賛と思われる。この円満院門主は信尹の父前久のひ孫にあたり、慶長一二年（二六〇七）に円満院に入寺し、慶長一七年に門主を相続した^④という常尊と推定され、慶長一九年に亡くなった信尹最晩年の作品であったことがわかる。また信尹自筆と推定される堅田落雁画賛^⑤もみつかっているが、柴田氏紹介の画賛に含まれる堅田落雁図とは異なる構図で描かれている。江戸時代中期の国学者伴蒿蹊が友人の家でみたという信尹の自筆奥書がある信尹歌は巻物であり、これらの画賛とは全く形態が異なる。このように信尹は複数の作品に近江八景歌を残しており、いずれを通じて後世に伝播したのか特定できかねるが、いずれにせよ、一七世紀中葉以降、信尹歌は詩歌や絵画世界において伝播していく。

承応二年（一六五三）、後水尾院の命で飛鳥井雅章が編んだ類題歌集「数量和歌集」^⑦に、信尹歌が、瀟湘八景を詠んだ「八景歌」や「南京八景」「修学院八景」などとともに記されている。先学が指摘するように「数量和歌集」は、国立歴史民俗博物館所蔵高松宮旧蔵禁裏本、宮内庁書陵部所蔵伏見宮家本、仙台伊達家所蔵本など、禁裏や公家の蔵書のみならず、大名家の蔵書のなかにも写本をみいだすことができる。また、「数量和歌集」と同様の内容を持つ歌書として、天和二年（一六八二）左京大夫風早公前（公長）の奥書を持つ国立公文書館所蔵「百人一首始風早公前卿書集」、越前松平家に伝わった歌書「集書」などの存在も指摘されている。先学が指摘する以外にも、「民部権大輔」こと公家高倉永福が某僧侶の懇望により書写した歌書、八戸藩南部家に伝わる地下歌人望月長孝の奥書を持つ「師伝書」、肥前鹿島藩鍋島家に伝わる合写本、大和郡山藩柳沢家に残る郡山藩三代藩主保光の自筆歌書、源豊資が正徳二年（一七一二）に編纂した「数量和歌集」^⑧等々、信尹歌を含む歌書は多くみいだすことができる。和歌を詠む際に参照すべき先例の一つとして、堂上公家のみならず、地下歌人や大名にまで、信尹歌が広まっていたといえる。

このうち源豊資編「数量和歌集」は、先述した飛鳥井雅章編「数量和歌集」とは内容を全く異にする歌書で、奥書によれば、中院家諸大夫小川縫殿助（祐寿）の兄弟である青地氏某が所持する中院通茂選「三灯集」三帖の正徳二年書写本と、

笠原玄蕃（雲溪）所有「金玉集」の元禄年中書写本を合わせて校合した歌書である。中院通茂選「三灯集」は、現在、宮内庁書陵部が所蔵する地下歌人水田長隣による抄写本しか現存しない歌書である。^⑭宮内庁書陵部本「三灯集」は、奥書に飛鳥井家「数量和歌集」記載のものや、板本として広まっている歌は省いて筆写した旨が記されているように、信尹歌収録の有無はわからない。しかし源豊資「数量和歌集」には末尾に「三灯集」全三冊五巻の目録を載せておりその全容がうかがえ、「三灯集」にも「近江八景之和歌」が掲載されていたことがわかる。

編者の源豊資は伝未詳だが、宝永六年（一七〇九）の「住吉社奉納千首和歌」^⑮に、「京都住 太田半三郎 豊資」と名前が載る人物と思われる。この事例では靈元院歌壇において中心的役割を果たした中院通茂から、現在は伝未詳であるような無名の地下歌人に至るまでの知の伝播経路が明らかになる。このようにして、信尹歌が堂上歌壇のみならず地下歌壇までも伝播していたのだが、そのなかで信尹歌を先例として学ぶだけではなく、近江八景を詠題として新たに和歌を詠むという行方も行われている。

高松宮家に伝えられた禁裏本のなかに残る「絵讚歌」^⑯という後西院と廷臣による詩歌会の記録がある。記録に記された詩歌会参加者の官位や生存年から、この記録は、裏松意光の寛文七年（一六六七）一一月一七日権右少弁就任以降、桂昭房の寛文八年七月一五日死去以前の詩歌会の記録と推定される。国立歴史民俗博物館の目録では後水尾院の記録とするが、この時期「新院」と称されるのは、寛文三年に讓位した後西院である。この詩歌会参加者のうち、照高院道晃、白川雅喬、飛鳥井雅章、中院通茂、日野弘資、烏丸資慶、近衛基熙、後西院が、三井晚鐘以下の近江八景を詠題に和歌を詠んでいる。例えば後西院は、比良暮雪の詠題で次の歌を詠んでいる。

そことなく麓の里はくれそめてひらの高ねそ雪にさやけき

この歌は後西院の家集「水日集」^⑰にも収録されているように、後西院自身の和歌である。このように新たに近江八景歌を詠む行方も行われているが、和歌学びのテキストとして各種歌書に広がるのは、すでにテキストとして定着していた

信尹の近江八景歌であった。

信尹歌がもとと画と和歌が一体となった作品であったように、絵画世界でも近江八景は伝播していく。江戸城や内裏の障壁画には、各地の名所とともに近江八景も描かれている¹⁸⁾。そして近江八景画には信尹歌が添えられることも多い。例えば、貞享初年（一六八四）に行われた朝仁親王（後の東山天皇）御所の造宮に際し、常御所襖絵の下絵として狩野探幽の弟子桃田柳栄が画いた近江八景画巻のなかには鷹司兼熙、花山院定誠、園基福、庭田重条、清水谷実業、醍醐冬基、中院通茂、大炊御門経光といった堂上公家を染筆者とする信尹歌が書かれている¹⁹⁾。

このように信尹の近江八景歌は和歌写本や絵画作品を通じて広く流布していたが、実は信尹の歌として広まったわけではない。和歌の作者については、前稿にて、近衛前久説（『江源武鑑』）、近衛政家説（『扶桑名勝詩集』）、近衛時嗣説（『鳴羽搔』『吾妻紀行』）、近衛信尹説（『鳴羽搔』注記）、近衛時熙説（『日本国花万葉記』『和漢三才図会』『東海道名所図会』）など、種々の刊本において諸説が乱立していることを指摘したが、歌書においても複数の作者説が確認できる。飛鳥井雅章編「数量和歌集」では、近江八景歌の作者を明記しておらず、上述の望月長孝の「師伝書」や、肥前鹿島鍋島藩に伝わった歌書では、ともに「栄雅（或近衛関白晴嗣公トモ）」と、栄雅、すなわち室町期の飛鳥井雅親説と、近衛関白晴嗣こと近衛前久説を併記している。「百人一首始風早公前卿書集」²⁰⁾では、同様に「栄雅（或説近衛関白晴嗣公ト云々）」と記した上で「栄雅或説」の部分で抹消して近衛時嗣説を残している。源豊資編「数量和歌集」では、時嗣説、政家説、信尹説を併記している。

ここからテキストが書写されるなかで、晴嗣が時嗣という近衛家の系図には名前がみえない人物の名前に誤写され、その時嗣説が刊本テキストに採用され流布していき、さらにそれが時熙説に転化して伝播していく様子がかがえる。

近衛信尹作とはつきり明記した菅得庵の記録については、前稿において、京都の蔵書家村井古巖が天明四年（一七八四）に神宮文庫の前身林崎文庫に寄贈した本のうちの一冊、島原藩深溝松平家二代目忠房の蔵書印があり一七世紀後半成立と

推定される筆写本「歌書集」収録「膳所八景詩歌」、元禄元年（二六八八）頃に成立した原田蔵六による近江民間地誌「淡海地志」のみにみられるもので、その伝播が限定的なものにとどまっていたと指摘した。しかし、その後、公家今出川公規の蔵書印がある今出川家旧蔵本^{②①}や、阿波藩主蜂須賀家の旧蔵本^{②②}、岡山藩池田家文庫蔵歌書の目録^{②③}などにも当該史料の写本をみいだすことができた。昔の記録も一部の公家や大名家の蔵書に一定の広がりをも有したのだが、刊本に採用されず、主に他のテキストにより信尹歌が普及したことにより、作者説の混乱が生じたものと想定される。

以上のように、堂上歌壇や地下歌壇における和歌のテキストや、絵画作品を通して、作者については混乱をみながらも、信尹歌が伝播していたのである。ここで検討した歌書のほとんどには近江八景歌の前後に南都八景歌が載る。近江と大和は山城に次いで歌枕の多い国として知られているように^{②④}、公家たちが住まう京都からも近く、風情ある情景を持ち、古くより和歌と馴染み深い地域である。その地域を代表する名勝を選び詠んだ近江八景歌は、和歌を学ぶものが知っておくべき先例として、伝播の範囲を広めていったといえよう。

二 近江八景詩の伝播

近江八景詩については、詠題は信尹歌に準拠しながら、独自の詩を詠んでいる事例が多くみられる。藤原惺窩の弟子菅得庵は、寛永元年（一六二四）に、信尹の和歌に倣って「膳所之八景」を詠んでいる^{②⑤}。玉質宗樸も慶安二年（一六四九）正月に「近州八景」と題した漢詩を詠んでいる。さらに寛文二年（一六六二）に京都の書肆荒川宗長が刊行した『羅山先生詩集』^{②⑥}には、林羅山が詠んだ「近江国琵琶湖八景」と題した漢詩が載る。延宝二年（一六七四）に京都の村上平樂寺が刊行した深草元政の詩集『艸山集』^{②⑦}にも、「和琵琶湖八景并序」と題した序文と八景詩が載っている。

ここにあげた漢詩はいずれも、石山秋月など八つの詠題は信尹歌と共通する。このように一七世紀前半以降、信尹歌が伝播していくなかで、公家や五山僧、儒者、大名といった高い文化資本を有するものたちの間で、詩の題材としても近江

八景が広まっていたことがわかる。

しかし、固定化した知識としての近江八景詩としては、先に紹介した林羅山や深草元政といった著名人の作品ではなく、現代では無名の玉質宗樸の作品が伝播することになる。例えば上述した越前松平家所蔵の詩歌集「集書」や、源豊資編「数量和歌集」には、それぞれ「江州八景」「近江八景詩歌」として玉質宗樸の近江八景詩が、宗樸の詩歌文集「黔驢集」掲載のものと同じく詠題ごとに二首ずつ載っている。「黔驢集」は現在、国立国会図書館が所蔵する円光寺旧蔵本以外では、二巻上と一巻上のごく一部のみを写した抄写本^②が知られるのみであるが、前稿で明らかにしたように、宗樸は正保二年（一六四五）七月の畿内追放から寛文四年（一六六四）一月の赦免にいたる近江謫居中も、京都の文人たちと親しい交流を続けていた。越前松平家所蔵「集書」では、「朴長老」の脇に「円光寺住僧、相国寺在內、今ハ一乗寺ニアリテ、身ハ江州ニ隱居ナリ」と注記しており、宗樸が江州隱居時代に既に近江八景詩が流布していた可能性も想定できる。

写本として広まるなかで誤謬も生じている。「黔驢集」と、歌書類掲載の近江八景詩の語句を比較すると、唐崎夜雨の二句目が、「黔驢集」清書本では「朦朧山色暮雲横」となっているのに対して、書写本ではすべて「玲瓏山色暮雲横」と、「朦朧」とは正反対の意味となる「玲瓏」と書かれており、書写の過程で誤写が生じていることがわかる。

以上、信尹歌と、玉質宗樸の近江八景詩が写本の形で、公家さらには大名、地下歌人などの文化圏において、広く流布していたことを確認した。次章においては、一七世紀末以降の近江八景の伝播に大きな影響を与えた『扶桑名勝詩集』と、その板元である吉田四郎右衛門に注目してみたい。

① 前稿発表後、杉本善郎（江陽釣史）氏、関谷真可榘氏、米山梅吉氏の研究において、それぞれ菅得庵の記録に基づいたと思われる近江八景信尹選定説を紹介していることを知った。三氏の研究は、柴田実氏の研究に参照されなかったこともあり、菅の記録とともに忘れ去られてしまったものと思われる。杉本善郎「近江八景案内」杉本善郎、一

八九四年、一頁。関谷真可榘「八景論並佐伯八景歌」（国学院雑誌）第二九卷第三号、国学院大学、一九二三年）五二～五四頁。米山梅吉「近江八景」（米山「銀行行余録」日本評論社、一九二七年）一六七～一六八頁。

② 前掲はじめに注①柴田論文 図版第一。

- ③ 「近衛信尹書状」《センチュリー文化財団所蔵慶應義塾大学附属研究所道文庫寄託資料（〇〇六一―〇〇〇〇）》…センチュリー文化財団ホームページ「コレクション」参照（以下、同館所蔵史料はすべて同じ）。
- ④ 肥後和男「古市播磨の子孫」（肥後「日本文化」弘文堂、一九三九年 初出一九三七年）三五九―三六二頁。
- ⑤ 「近衛信尹筆堅田落雁図自画賛」《センチュリー文化財団所蔵慶應義塾大学附属研究所道文庫寄託資料（〇二〇九―〇〇〇〇）》。
- ⑥ 「開田耕筆」巻一〈享和元年（一八〇二）刊〉《国文学研究資料館（九五／一／一）》…同館ホームページ「所蔵和古書・マイクロ／デジタル目録データベース」（以下、国文研サイト）参照（以下、同館所蔵史料はすべて同じ）。
- ⑦ 「数量和歌集」上巻《宮内庁書陵部（二二〇・七一六）》…国文研サイトに参照》。
- ⑧ 三村晃功「飛鳥井雅章編『数量和歌集』の成立」（三村「近世類題集の研究」青簡舎、二〇〇九年 初出二〇〇八年。川平ひとし「名数・数量と和歌表現」（川平ひとし・大伏春美編『鳴の羽搔 影印本』新典社、二〇〇五年）。
- ⑨ 「三十六人歌合」《佛敎大学図書館（G国／三三二五／一）》。
- ⑩ 「師伝書」《八戸市立図書館所蔵南部家旧蔵本（南一五―三八四）》…国文研サイトに参照》。
- ⑪ 「自讃哥等歌書」《祐徳稲荷神社中川文庫（ユ二―六六―二―E）》…国文研サイトに参照》。
- ⑫ 「歌書」《柳沢文庫保存会（仮〇四―四二二）》。
- ⑬ 「数量和歌集」上巻《龍谷大学大宮図書館写字台文庫（九二―二〇八／五四―W／一）》。
- ⑭ 日下幸男「狭山の文人」（日下「近世古今授史の研究 地下篇」新典社、一九九八年 初出一九八三年）七四三―七四五頁。
- ⑮ 「住吉社奉納千首和歌」恋部（多治比郡夫・上野洋三編『上方芸文叢刊』第一巻、上方芸文叢刊行会、一九八二年）一七二頁。
- ⑯ 「絵歌歌」《国立歴史民俗博物館所蔵高松宮家伝来禁裏本（H―六〇〇―三三二五／ふ函七）》…同館ホームページ「館蔵高松宮家伝来禁裏本」データベース参照（以下、同館所蔵史料はすべて同じ）。
- ⑰ 「水日集」第一冊《国立歴史民俗博物館所蔵高松宮家伝来禁裏本（H―六〇〇―一五〇六／る函二二九）》。
- ⑱ 武田恒夫「名所の景物」（武田「日本絵画と歳時」ペリかん社、一九九〇年）。
- ⑲ 前掲はじめに注④「近江八景」九一―一〇頁。
- ⑳ 「百人一首始風早公前卿書集（目録題「歌書」）《国立公文書館内閣文庫（二〇一―三三九〇）》。
- ㉑ 「膳所八景倭歌」《東京国立博物館所蔵今出川家旧蔵本（QA―三二六九）》。
- ㉒ 「古今打開膳所八景詩歌」《広島大学中央図書館貴重資料室（ワカ一九）》。
- ㉓ 「歌書目録」（久保木秀夫「中古中世散佚歌集研究」青簡舎、二〇〇九年）四七二頁。
- ㉔ 鶴崎裕雄「日野の中世文学」（日野町史編さん委員会編『近江日野の歴史』第二巻、滋賀県日野町、二〇〇九年）。
- ㉕ 前掲。趙剛「羅山の漢詩における詩情について」（趙「林羅山と日本の儒学」世界知識出版社、二〇〇六年 初出一九九九年）九五頁。ただし趙氏は典拠史料名を「瀟湘八景詩」と誤記している。
- ㉖ 「羅山先生詩集」巻八《京都大学附属図書館（四―〇三／ラ／九）》。
- ㉗ 「岬山集」巻十九畧之卷（富士川英郎ほか編『詩集日本漢詩』第一三巻、汲古書院、一九八五年）二二五―二六頁。

⑳ 『黔驢集』（四天王寺大学図書館恩頼堂文庫（五九〇号））。

㉑ 『集書』（福井県立図書館松平文庫（M九二／二五））…国文学研究

資料館所蔵マイクロフィルム参照。

第二章 『扶桑名勝詩集』と板元吉田四郎右衛門

一 『扶桑名勝詩集』と近江八景詩

延宝八年（一六八〇）、京都の書肆吉田四郎右衛門が刊行した詩歌集『扶桑名勝詩集』^①に、「近衛政家公」作とされた「近江琵琶湖八景」和歌と、相国寺朴長老「近江八景」、林羅山「近江琵琶湖八景」、菅得庵「近江八景」、熊谷立設「江州八景」、草山元政「和琵琶湖八景并序」という五人の近江八景詩が載っている。

近江八景詩は、相国寺朴長老こと玉質宗樸の詩歌文集「黔驢集」では、各詠題に二首ずつ載っているのに比べて、『扶桑名勝詩集』では一首ずつのみ載っているという点が大きく異なる。前章で指摘した語句の異同については、流布本での誤謬が踏襲されており、円光寺が所蔵する「黔驢集」ではなく、流布写本をテキストとして、一首ずつのみ限定した形で『扶桑名勝詩集』に近江八景詩が収録されたと推測される。

第三章で詳細に検討するように一七世紀末以降に、近江八景詩歌が、歌書や詩集、紀行文や地誌、日用教養書などに掲載されることで、近江八景という知識が伝播していった。そしてその各種メディアで流布する近江八景詩は、「黔驢集」掲載の各詠題二首ずつの近江八景詩ではなく、『扶桑名勝詩集』掲載の各詠題一首ずつの近江八景詩なのである。写本での伝写段階では、例えば禁裏に伝わった写本歌集「八景詩歌三十六人歌合等」^②や、肥前鹿島鍋島藩に伝わった合写本では、詠題ごとに二首ずつではなく一首ずつ宗樸の近江八景詩を載せるが、そこに載る詩は、『扶桑名勝詩集』掲載のものとは異なる組み合わせで「黔驢集」から選ばれている。しかし第三章で検討するような各種刊本メディアでは、『扶桑名勝詩集』

掲載の組み合わせのものしか伝播しない。後世へ近江八景詩を伝えるメディアとして、『扶桑名勝詩集』が大きな役割を担っていたことがわかる。

二 書肆吉田四郎右衛門と朝廷

『扶桑名勝詩集』の編者吉田元俊と板元吉田四郎右衛門については、井上敏幸氏が本書跋文から指摘するように、同一人物である。^④ 書肆としての吉田四郎右衛門については、京都において、一七世紀中葉より和歌や物語などの古典の出版活動をを行った書肆であり、また江戸後期の当主元長は、小沢蘆庵門の歌人として、蘆庵の書物や、上田秋成の書簡集、荷田春満の家集など蘆庵関係者の書物を刊行していることなどが明らかになっている。^⑤ 宗政五十緒氏は、『増益書籍目録大全』(元禄九年板)の分析により、書肆としての吉田四郎右衛門の活動は、歌書がその出版の中核であること、上京に店を構え、公家方の有職書が目立つことから、その営業は公家方の学芸に支えられていたことを示唆している。^⑥ 安永三年(一七七四)吉田四郎右衛門刊の『古今集真名字解』^⑦巻末に、「歌書并二紀類目録」として吉田四郎右衛門家の扱う歌書と有職故実書の目録が載っているように、確かに吉田家自身も、歌書と有職故実書の出版を営業の核と捉えていた。

また井上隆明氏が指摘するように、^⑧ 延享二年(一七四五)刊の『京羽二重大全』^⑨に禁裏御書物所として野田弥兵衛とともに吉田四郎右衛門の名前があがっている。その後だされた『京羽二重大全』の増補改正板^⑩でも、禁裏御書物所として吉田四郎右衛門を継続的に確認できる。嘉永七年(一八五四)刊『紫式部日記傍註』^⑪の刊記において、吉田は「御用御書物所」を名乗っており、幕末期に至るまで禁裏御書物所を勤めていたようである。

禁裏御書物所については、禁裏御用菓子屋を勤めた虎屋黒川家文書に残る「御出入商人中所附」^⑫という、元禄一四年(一七〇二)段階の禁裏御用商人を書き上げた史料が存在する。この記録には、禁裏御用として三四種類以上の業種があるなかで、書物類の御用商人の記事も載っており、後光明院の代(在位は寛永二〇年(一六四三)〜承応三年(一六五四))

よりの御用書肆として、唐本屋清兵衛、同与兵衛、風月庄左衛門、田原二左衛門、唐本屋吉左衛門の名前が、東山院の代（在位は貞享四年（一六八七）～宝永六年（一七〇九））よりの御用書肆として、吉田四郎右衛門、吉野屋佐兵衛、吉文字屋庄右衛門、上村次郎右衛門の名前があがっている。

禁裏御書物所の具体的な活動内容については、風月庄左衛門の明和九年（一七七二）から翌安永二年までの日記「日曆」^⑬などにも記事がなく、その詳細は不明だが、他の出入り職人と同様と考えれば、朝廷にて購入する書物を納入する書肆と想定できよう。

このような吉田四郎右衛門と朝廷との関連は、比較的早い時期から他の史料からも確認できる。鳳林承章の「隔裏記」^⑭正保四年（一六四七）八月一四日条には、賀茂の南可が「開板屋吉田四郎右衛門」とともに、公家の芝山宣豊のもとを訪れたこと、この度開板された「廿一代集之内拾三冊之歌書」が、宣豊を通じて時の仙洞、後水尾院に献上されたことが記されている。ここで献上されている二十一代集は、吉田四郎右衛門が正保四年に刊行した刊本で、正保板本として広く流布して、現代もテキストとして高い評価を受けているものである。寛永文化サロンに、吉田四郎右衛門も書肆として関わり、高い水準の知を産み出していたことがわかる。

江戸中期に至っても、例えば江戸時代前期堂上歌壇の代表的歌人である烏丸光広の家集『黄葉和歌集』を寛保三年（一七四三）に京都の書肆中井平治郎との合板で再板したり、当該期朝廷における代表的有職故実家である公家滋野井公麗による「滋野井家御蔵板」の『禁秘御鈔階梯』を安永九年（一七八〇）頃に刊行したり^⑮しているように、公家との関わりを強くもつた出版活動が続けていたことがうかがえる。

『黄葉和歌集』（元禄二二年（一六九九）初板）は江戸時代に初めて刊行された当代公家の家集として知られているが、^⑯田の寛保再板興書には、「烏丸家黄葉和歌集、近年伝世書写之誤及魯魚故、需家司（荒木）能登守榮緑、正本令改板者也」とあり、^⑰烏丸家側から出版の働きかけがあったことがわかる。また『禁秘御鈔階梯』については、この時、滋野井家は同

時に「公事根源」と「職原抄」の注釈書の刊行も企図していたが、「先板所持之者差支」があり、「公事根源」と「職原抄」については出版を断念しており、吉田四郎右衛門家が板権を持っていた「禁秘抄」（慶安五年（一六五二）田中理兵衛刊本の後印本を刊行）の注釈書『禁秘御鈔階梯』についてののみ板行に至ったことが京都書林仲間の記録^⑨よりしられる。

これらの事例は出版に消極的であったといわれる公家^⑩が、自らの産み出した知を社会に広めようとした事例として特筆すべきものであるが、ここではそのような試みに吉田四郎右衛門が関与している点に注目したい。宗政五十緒氏が吉田四郎右衛門の別家として想定している吉田三郎兵衛も、堂上歌壇で流布していた歌書の内容を載せる『鳴羽搔』（元禄四年（一六九二）刊）を刊行している^⑪。また同じく吉田家の別家である吉田治兵衛も、堂上方蔵板の『鎮西琉球記』の売り広めを大坂の書肆天満屋安兵衛とともに勤めている^⑫。これらの事例から吉田一門（他にも享保一〇年（一七二五）、住吉大社御文庫に『扶桑名勝詩集』を奉納している吉田次郎三郎^⑬、同じく『禁秘鈔』を奉納している吉田勘右衛門も一門か）は朝廷社会との縁を強くもった書肆として活動を続けていたことがうかがえる。

三 院雑色としての吉田四郎右衛門家

ではなぜ吉田四郎右衛門はこのような朝廷社会に密接した活動を行うことができたのか。先に『京羽二重大全』各板に禁裏御書物所として吉田四郎右衛門の名前が載っていることを述べたが、実は同書には、吉田の名前を他の箇所にもみいだすことができる。朝廷に出入りする地下官人の一覧のうち、「両局蔵人方催之外」の院雑色として、「吉田四郎右衛門佐伯元賞」という名前がみえるのである^⑭。

地下官人の家譜を載せる「地下家伝」^⑮には、院雑色吉田家の家譜が載っている。その家譜によれば、吉田家（姓は佐伯）は、戦国時代の清吉の代までは粟津を称した家であった。清吉の息子自当（文禄元年（一五九二）生、寛文一〇年（一六七〇）没）以下、元俊（正保三年（一六四六）生、宝永五年（一七〇八）没）、元信（延宝三年（一六七五）生、享保一〇年（一七二五）

没）、元貴（正徳元年（一七二一）生、明和九年（一七七二）没）、元軌（延享二年（一七四五）生、安永六年（一七七七）没）、元長（安永三年（一七七四）生、文政七年（一八二四）没、元豊（文化三年（一八〇六）生、天保七年（一八三六）没）、元秀（文政二二年生、没年未詳）と続いている。

院雑色吉田家の家譜のなかに、書肆吉田四郎右衛門としてしられる、『扶桑名勝詩集』の編者兼板元である元俊や、小沢蘆庵門人として著名な元長の名前を確認できる。また住吉大社御文庫への享保一〇年奉納本『令義解』の奉納記には、「京御書物所 吉田四郎右衛門佐伯元信」とあり、院雑色吉田家の家譜に名前が載る人物が、書肆として奉納を行っている。すなわち院雑色の吉田家は、書肆の吉田四郎右衛門と同じ家なのである。

「地下家伝」所載家譜では、『扶桑名勝詩集』の編者兼板元である元俊と、その父自当の略歴は次の通りである。

自当

文禄元年九月三十日 生

慶安五年八月 補院雑色 于時称号改吉田

寛文十年十一月廿八日 死（七十九歳）

元俊（自当男）

正保三年八月十三日 生

寛文二年 補院雑色（十七歳）

宝永五年六月廿五日 死（六十三歳）

ここから、先にみた「隔黄記」の記事にでてきた吉田四郎右衛門は、『扶桑名勝詩集』を刊行した元俊の父自当であり、吉田家は元俊の代より禁裏御用書物所を勤めていたことがわかる。元俊の代において吉田四郎右衛門は、延宝元年（一六七三）『湖月抄』、延宝三年『石清水若宮歌合』、同年『和謔指南抄』、同年『増註唐賢絶句三體詩法備考大成』、貞享二年

(一六八五)『高良山十景詩歌』(吉田元俊名義)、元禄九年(一六九六)『歌林雜木抄』、同年『三玉和歌集類題』、元禄一三年(一七〇〇)『三体詩詳解』、宝永五年(一七〇八)『新勅撰和歌集』といった書物の出版を行っている。元俊の代においては、家集や歌字書などの和歌関連書とともに、一七世紀末に流行していた漢詩学習書²⁴⁾の出版にも力を入れていたことがうかがえる。

四 院雑色の職掌と兼業

吉田家が書肆活動を行うとともに勤めていた院雑色は、田中・原田・座田(天明六年(一七八六)より二家)・吉田の四家が勤める朝廷の役職である。下橋敬長が「仙洞さんの雑色と思し召してはいけませぬ²⁵⁾」というように、藤原氏の氏院である勸学院の雑色であり、藤原氏の氏神である春日大社における春日祭祀に際して、氏長者よりの奉幣調進と神馬牽きを勤めるのが主な役職である。西院村に江戸時代初頭より四家あわせて三石の知行を有しており、禁裏上御倉役を務めた立入宗政の記録によると、天保三年(一八三二)段階では、田中家が九斗、残り三家(座田別家は記載なし)が七斗ずつの知行を持っていた²⁶⁾。

院雑色の江戸時代の活動については、京都大学大学院文学研究科図書館が所蔵する「院雑色諸家伝」と題する史料により、その概要が明らかになる。この史料は、院雑色四家の家譜と、天保期に院雑色が行った仙洞の雑色としての再興運動に際して、四家が所蔵する天正一九年(一五九二)から天保期までの「旧例并願書控書」などを書き留めた史料である(掲載家譜と「地下家伝」掲載家譜との比較により、天保五年一月〜天保六年九月の間の作成と類推できる)。例えば、寛永三年(一六二六)後水尾院の二条行幸に際して中和門院に供奉した記録が載るが、同時代の公家の日記「職忠職在記」²⁷⁾に「女院御車之後 主典代(六位右大史安倍盛勝)、庁官(紀宗査)、雑色(四人)各左右供奉、歩行也」とあるように、引用されている古文書の内容は同時代史料でも確認ができ、その内容も信頼できる史料である。この史料により、貞享元年(一六八

四)の春日祭より氏院奉幣の調進を、宝曆三年(一七五三)の春日祭より神馬進献を行うようになり、原田・田中両家がそれを勤めたこと、宝曆年中に官位再興の運動を行ったこと、明和六年(一七六九)より田中・原田両家が奉幣方、座田・吉田の両家が神馬方を勤めるようになったこと、文化一〇年(一八一三)に仙洞の雑色を自称し、後桜町院の葬送への供奉を願う訴願を行ったが、藏人頭より「院中之雑色二而ハなく、全く氏院之雑色」であるという認識を示され却下されたことなど、江戸時代における院雑色の活動の概要をすることができる。

本史料に含まれる天保五〜六年頃に書かれた広橋家雑掌小泉直記宛の上申書のなかで、院雑色原田美彦が説明するように、院雑色は、春日祭礼の役を務める以外は「唯職名斗相唱へ知行而已頂戴仕」役職であった。その知行も四家あわせて三石と極めて少禄であり、彼ら自身、仙洞の雑色としての再興を願ってはいるが、「御下行等之儀二者聊相拘り不申」と述べているように、生計を支える役職としては認識していなかったのである。

例えば、吉田家以外の事例をみると、原田家は、幕末期の寧遠が、朝廷典医百々家の門弟として名前がみえる医師であったことが確認できる。また座田家は、安政二年(一八五五)の内裏造営時に御常御殿に「高宗夢賚良弼図」^⑤を画いた座田重就が著名であるが、その祖父座田益宣も、安永九年(一七八〇)より朝廷の屏風画御用を勤めており、益宣の息子重増(中務少録)と維親(大隅守)も、鶴沢探索門下の絵師として寛政度内裏造営に際してそれぞれ内侍所に四季花鳥と芦鶴の図を描いている。^⑥なおこれまで座田重就らは上賀茂社氏人とされてきた。^⑦『地下家伝』掲載の系図では、確かに院雑色座田家と、朝廷で右官掌も勤める上賀茂社氏人座田家の祖は同じ人物であるが、少なくとも江戸時代賀茂社の史料に、院雑色座田家の人物はみいだすことができず、院雑色座田両家と上賀茂社氏人座田家とは別家であると思われる。

座田維親は、寛政度御所障壁画作成の準備が進められている最中に、「職掌二而春日祭参向」のため京都を離れており、画業と院雑色としての職務を並行して勤めていることがうかがえる。御所造営時の障壁画担当絵師の選定に際して、地下官人が優遇されたことが指摘されているが、座田家にとって、院雑色であることはその絵師としての活動にも大きな影響

を与えていたと想定される。

同様に『扶桑名勝詩集』の刊行書肆吉田四郎右衛門も、朝廷の地下役人である院雑色という側面も有しながら、同時に書肆としての活動を営んでいたのである。吉田四郎右衛門の書肆としての活動を検討するに際して、院雑色という、名ばかりではあるが朝廷の役を勤める家として朝廷関係者との繋がりを持ちえたということを考慮する必要がある。飯倉洋一氏は、朝廷周縁社会に存在していた非藏人や地下官人の文事活動に注目して、彼らを堂上公家と地下の文人とをリンクする存在として位置づけている^④。また藤實久美子氏は書肆出雲寺時元の活動に注目して、朝廷周辺で広まっていた知を諸階層に開放する役割を果たしたことを指摘している^⑤。院雑色である書肆吉田四郎右衛門も、同様の役割を果たしていたといえる。

このように書肆吉田四郎右衛門の素性とその活動をみていくと、近衛信尹の近江八景歌や、当時の朝廷文人たちとも交際の深かった玉質宗樸の近江八景詩が『扶桑名勝詩集』に収録されたこともよく理解できよう。朝廷やその周辺の文化圏において広まっていた作品を、吉田四郎右衛門が日本各地の景物を集めた詩歌集という形でまとめて刊行したことで、『扶桑名勝詩集』は後世への影響力を持つにいたったのである。『扶桑名勝詩集』において、「朴長老」こと玉質宗樸の詩が、近江八景詩としては先頭に載ったこともあつてか、これ以後、林羅山や深草元政といった一七世紀を代表する文人ではなく、彼らに比べれば知名度の低い宗樸の詩が、近江八景詩として流布していくことになる。以下、次章では、近江八景詩歌の種々のメディアにおける展開、特に、日用教養書における展開を検討していく。

① 『扶桑名勝詩集』上之一巻《京都大学附属図書館（四一〇二ノフ／一九九六年）二四頁。

② 「八景詩歌三十六人歌合等」（目録題「数量和歌」）《国立歴史民俗博物館所蔵高松宮家伝来禁裏本（日一六〇〇—三四五／ふ函九五）》。

③ 前掲一章注⑩（「自讃哥等歌書」）。

④ 井上敏幸「高良山十景詩歌」の反響」『雅俗』第三号、雅俗の会、一九九六年）二四頁。

⑤ 井上泰至「吉田四郎右衛門」〔井上宗雄他編「日本古典籍書誌学辞典」岩波書店、一九九九年）。

⑥ 宗政五十緒「吉田四郎右衛門」〔宗政「近世京都出版文化の研究」

- 同朋舎出版、一九八二年 初出一九八一年。
- ⑦ 『古今集真名字解』下二巻《慶應義塾図書館（二一三／五四／四）… Google ブックス参照》（以下、同館所蔵史料はすべて同じ）。
- ⑧ 井上隆明『改訂増補 近世書林板元総覧』（日本書誌学大系七六）青葉堂書店、一九九八年 七九四頁。
- ⑨ 『京羽二重大全』巻三《洛下 橋屋治右衛門刊》《京都大学大学院文学研究科図書館顕原文庫（Vh／八）》。
- ⑩ 明和五年（一七六八）板『明和新增 京羽二重大全』《早稲田大学図書館（ル四／三七七三）…同館ホームページ「古典籍総合データベース」参照》（以下、同館所蔵史料はすべて同じ）。天明四年（一七八四）板『天明新增 京羽二重大全』《早稲田大学図書館（ル四／〇三七七四）》。文化八年（一八一）板『文化増補 京羽二重大全』《立命館大学アート・リサーチセンター（arcBK04／〇〇一四）…同館ホームページ「書籍閲覧システム」参照》。
- ⑪ 『紫式部日記傍註』下巻《慶應義塾図書館（二〇五／七七／二）》。
- ⑫ 『御出入商人中所附』《虎屋文庫所蔵虎屋黒川家文書（三号）…同志社女子大学図書館所蔵マイクロフィルム参照》。
- ⑬ 彌吉光長『風月庄左衛門「日曆」（彌吉「彌吉光長著作集」第三巻、日外アソシエーツ、一九八〇年 初出一九七三年）。
- ⑭ 『隔衰記』第二巻、鹿苑寺、一九五九年 二二一～二二三頁。
- ⑮ 佐竹朋子『一八世紀公家社会における学問と家業』（『ヒストリア』第三三五号、大阪歴史学会、二〇一二年）。
- ⑯ 『濟帳標目』（宗政五十緒・朝倉治彦編『京都書林行事 上組濟帳標目』ゆまに書房、一九七七年）二六〇頁。
- ⑰ 市古夏生『書物の出版』（市古『近世初期文学と出版文化』若草書房、一九九八年 初出一九九三年）。
- ⑱ 『黄葉和歌集』《祐徳稻荷神社中川文庫（六／二一／二二五）… 国文研サイト参照》。
- ⑲ 『重板類板出入濟帳』収録「御尋二付口上書覚」《慶応三年（一八六七）五月一日》（宗政五十緒・朝倉治彦編『京都書林仲間記録 京都書林行事 重板類板出入濟帳』ゆまに書房、一九七七年）六六四～六六六頁。
- ⑳ 上野洋三『堂上と地下』（上野『元禄和歌史の基礎構築』岩波書店、二〇〇三年 初出一九八五年）。前掲はじめに注①拙稿。
- ㉑ 前掲一章注⑧川平論文。
- ㉒ 『乍憚口上書』（天保四年（一八三三））《岸雅裕編『京都書林仲間資料』岸雅裕、一九八一年）一〇～一一頁。
- ㉓ 『濟帳標目』（宗政五十緒・朝倉治彦編『京都書林仲間記録 京都書林行事 上組濟帳標目』ゆまに書房、一九七七年）五二九頁。「裁配帳」第四冊（天保六年（一八三五）四月一三日）《大坂本屋仲間記録》第九巻、大阪府立中之島図書館、一九八二年）三七一～三七二頁。
- ㉔ 『扶桑名勝詩集』巻之下貼付『奉納記』（住吉大社御文庫（五三一～二二））。
- ㉕ 『禁秘鈔』巻下貼付『奉納記』（住吉大社御文庫（二二二））。
- ㉖ 前掲注⑨『京羽二重大全』巻一。
- ㉗ 『地下家伝』巻二〇《正宗敦夫編『地下家伝』中巻、自治日報社、一九六八年）一〇〇～一〇一頁。
- ㉘ 『令義解』巻十貼付『奉納記』（住吉大社御文庫（二〇一四））。
- ㉙ 上野洋三『詩の流行と俳諧』（上野『芭蕉論』筑摩書房、一九八六年 初出一九七三年）。
- ㉚ 下橋敬長『幕末の宮廷』（東洋文庫三五三）平凡社、一九七九年 初出一九二二年 二〇八頁。
- ㉛ 西村慎太郎『近世地下官人と収入』（西村『近世朝廷社会と地下官人』吉川弘文館、二〇〇八年 初出二〇〇四年）一〇三・一〇八・一

一八・一二二頁。

② 「山城国葛野郡西院村御高人組御改帳 写」《京都大学大学院文学研究科図書館(国史)／五／八九》。

③ 「院雑色諸家伝」《京都大学大学院文学研究科図書館(国史)／六／四》。

④ 「職忠職在記」寛永三年(一六二六)九月六日条(黒川春村編『歴代残閩日記』第二八冊、臨川書店、一九九〇年)一七九頁。

⑤ 「受業生名籍」(京都府医師会医学史編纂編『京都の医学史』資料篇、京都府医師会、一九八〇年)三八七頁。

⑥ 京都国立博物館・宮内庁京都事務所・京都新聞社編『京都御所障壁画』京都新聞社、二〇〇七年。

⑦ 「禁中御用絵師任用願」(武田庸二郎・江口恒明・鎌田純子編『近世御用絵師の史的研究』思文閣出版、二〇〇八年)二四四頁。

⑧ 「造内裏御指図御用記」(前掲注⑦)『近世御用絵師の史的研究』三八九頁。

⑨ 「御造営記」(柴野栗山、寛政二年(一七九〇)跋)《早稲田大学図書館(ワ三／七六二／一)》。

⑩ 寺田貞次『京都名家墳墓録』山本文華堂、一九二二年。『京都市姓

氏歴史人物大辞典』角川書店、一九九七年。武田庸二郎「寛政度禁裏御所造営における絵師の選定について」(前掲注⑦)『近世御用絵師の史的研究』九四頁。

⑪ 「勘使所勤仕之伝」(国学院大学図書館所蔵賀茂別雷神社座田家文書(六三〇号)・国学院大学図書館編『マイクログフィルム版』賀茂別雷神社座田家文書)(雄松堂書店、一九九〇年)参照。

⑫ 前掲注⑧「造内裏御指図御用記」二八八頁。

⑬ 福田道宏「寛政度内裏造営における障壁画担当絵師の選抜過程とそこに見られる意図の研究」(鹿島美術研究 年報 第一九号別冊、鹿島美術財団、二〇〇二年)。

⑭ 飯倉洋一「本居宣長と妙法院宮」(『江戸文学』第二二号、ペリカン社、一九九四年)。飯倉洋一「妙法院宮サロン」(高田衛編『論集近世文学』第五卷、勉誠社、一九九四年)。飯倉洋一「濫觴期絵本説本における公家・地下官人の序文」(『江戸文学』第四〇号、ペリカン社、二〇〇九年)。

⑮ 藤實久美子「書肆出雲寺家の創業とその活動」(前掲はじめに注⑧)藤實著書 初出二〇〇〇・二〇〇二年。

第三章 刊本における近江八景詩歌の伝播

一 『扶桑名勝詩集』を介した伝播

先述したように『扶桑名勝詩集』は漢詩関連書の出版流行という動向のなかで刊行されたものであった。そのような動向は、在村において村落知識人が漢詩サークルを形成するような動向と一体となって進展していったであろう。『扶桑名勝

詩集』もそのなかで受容されたことが想定され、実際、学者や村落知識人層の蔵書のなかに同書の名前をみいだすことができる。例えば若狭国三方郡世久見浦の枝村食見（現福井県三方上中郡若狭町食見）で製塩業を営んでいた桜井市兵衛家が、延享四年（一七四七）に撰津の僧春潮房の借財を肩代わりして引き取った書物のなかに、『扶桑名勝詩集』全四冊が含まれている^③。また太宰府天満宮の御文庫には、元禄四年（一六九二）に長崎内中町の中島六郎右衛門次男甚蔵より『扶桑名勝詩集』が寄贈されている^④。さらに江戸時代後期になるが武蔵の国学者小山田与清の水戸徳川斉昭への蔵書献納記録や、三河の国学者村上忠順の図書購入記録^⑥にも、『扶桑名勝詩集』が載っている。

このような実際の蔵書の事例でなくとも、『扶桑名勝詩集』の広まりを確認できる事例は多くある。例えば、第一章で取りあげた地下歌人源豊資編「数量和歌集」では、「扶桑名勝詩集曰」といった形で注記がなされ、『扶桑名勝詩集』を中院通茂編「三灯集」などの写本歌書の校訂本として使っている。また宝永七年（一七〇〇）八月の序文をもつ植田下省編『兵庫名所記』^⑦では、「扶桑名勝詩集二出ル」として、兵庫十景・須磨浦十景を記している。さらに『扶桑名勝詩集』の名前を明記していない書物にも、その内容が広まっていくことを確認できる。宝永三年（一七〇六）、五老井許六が編纂した芭蕉門の俳文集『風俗文選』収録の李由「湖水賦」^⑧には、『扶桑名勝詩集』掲載の近衛政家近江八景選定説が載る。また近江の地誌として著名な「近江輿地志略」^⑨（享保一八年（一七三三）成立、寒川辰清編）にも、近江八景近衛政家選定説や『扶桑名勝詩集』掲載の漢詩が多数引用される。また貝原益軒の『倭漢名数』において、『扶桑名勝詩集』刊行二年前の延宝六年（一六七八）板では、近江八景の記事は比良暮雪以下の八景勝の名前を載せるだけのものではあったのが、『扶桑名勝詩集』刊行後の元禄五年（一六九二）増補板^⑩においては、八景選定者として近衛政家の名前を載せているのも、『扶桑名勝詩集』の影響とみなすことができよう。

このように雅文芸にとどまらず、俳諧書などの俗文芸や、さらには地誌類などにも『扶桑名勝詩集』の受容を確認できる。上述したように、これ以降流布する近江八景詩は、玉質宗樸の家集「黔驢集」収録のものではなく、『扶桑名勝詩集』

掲載のものである。『扶桑名勝詩集』を引用したことをはっきり明記していないものにも、引用・孫引きが行われて、その知が伝えられていくことになる。一冊の書物を知識人層が受容し、彼らが新たに産み出す書物にもその内容が転記される。そうすると、その読者たちにも射程を広げて、書物知が伝播していくという、江戸時代における書物知の流通構造がここにかがえよう。

二 各種メディアにおける伝播

「はじめに」で述べたように、江戸時代中後期にさまざまなメディアを通して、近江八景に関する知識が広がることは、すでに多くの論者が指摘しているところであり、地誌類や、名所図会、歌舞伎や浄瑠璃、浮世絵、さらには、着物や工芸品など、さまざまなジャンルの作品に近江八景を題材としたものがみられる。注目すべきは、近江八景が語られる際に、近江八景詩歌、すなわち信尹近江八景歌と宗樸近江八景詩が付随して展開することが多いことである。

例えば近江八景を描く絵画作品は、襖画や屏風画、絵巻作品として多く残されているが、浮世絵の世界でも、名所図の流行のなかで、近江八景を題材とした作品が数多く残されている。鈴木重三氏は、歌川広重の近江八景図を二四種紹介しているが、そのうち八作品に近江八景歌が書き込まれている。また鈴木氏紹介作品には含まれていない天保初期の広重の作品や、一八世紀後半の勝川春章の作品のように、近江八景詩が添えられた浮世絵も存在している。浮世絵のような多色摺ではなく、単色の簡易な一枚刷りの近江八景図も、江戸時代から明治にかけて多く摺られているが、そのような作品にも近江八景歌や近江八景詩が添えられていることが多い。^④

また演劇の世界でも近江八景を題材とした作品は多くあり、例えば延享二年（一七四五）に大坂豊竹座で初演があつた『詩近江八景』^⑤という作品は、初段が石山の秋の月、第二段が辛崎の夜の雨という具合に、近江八景が各段の演目になっている。例えば第五段矢橋の帰帆の冒頭は、「釣竿手熟す白頭の翁、辛苦客船西又東幾度の風帆帰去、湖水の波風

……」と始まっており、宗樸「矢橋帰帆」の「釣竿手熟白頭翁 辛苦客船西又東 幾度風帆帰去後 呂公榮達一盃中」を用いる形になつていようように、近江八景詩の引用から各段目が始まっている。^⑬

さらに工芸品の世界にも近江八景詩歌は広がっており、京狩野家九代目の狩野永岳が下絵を画き、清の陶工が嘉慶一八年（一八一三）に制作したという「青花琵琶湖八景図敷瓦^⑭」は、現在、北京の恭王府博物館や大津市歴史博物館などが所蔵する作品であるが、その側面には、「湖面朦朧画不成……」と宗樸近江八景詩が書かれている。

このように、さまざまなジャンルの文芸作品に近江八景の伝播を確認できる。その多くに信尹の和歌と宗樸の漢詩が添えられており、詩情あふれる名所としての性格を強調する機能を果たしていた。次に江戸時代において近江八景という知を社会に広める回路として大きな役割を果たしたのもとして日用教養書の附録記事に注目して検討を加える。

三 日用教養書と近江八景

「はじめに」で先述したように筆者は、往来物や節用集といった書物について、本文より前にある前付や、本文と同じ紙面の上欄にある頭書などに附録記事を含むことが多く、本を数冊しか持たないような家庭にも所蔵されることがあり、広く社会一般に日用知識、教養知識を伝える性質を持つ書物として、日用教養書と名付け注目している。すでに先行研究^⑮でも指摘があるように、近江八景は日用教養書の世界にも展開している。

享保一八年（一七三三）刊の長谷川妙舛書の女筆手本^⑯、明和七年（一七七〇）刊『さしもくさ』収録の戸田儀左衛門の女筆手本「近江八景の文」^⑰、文政四年（一八二二）刊の往来物『万宝字尽 女用続文章』収録の去留齋桃牛作「近江八景」^⑱など、近江八景を美文調で説明した文章を手習いの手本として載せる往来物が数種類刊行されている。また刊年未詳であるが、江戸の山崎金兵衛が刊行した長雄流石摺手本^⑲、同じく刊年未詳で江戸の江戸屋庄兵衛が刊行した江戸後期の書家芝学堂による手本^⑳のように、近江八景詩歌自体を手本として載せる手習用往来物も存在しており、往来物の世界における近江八景

表 日用教養書における近江八景記事

No.	書名	刊年	西暦	板元	場所	歌	詩	図
1	万民調宝記	元禄5	1692	大坂 灰屋孫兵衛他1書肆、江戸 本屋清兵衛	本文	○	○	○
2	大宝和漢朗詠集	正徳2	1712	京都 中川茂兵衛	頭書	○	○	○
3	女源氏教訓鑑	正徳3	1713	江戸 須原屋茂兵衛、大坂 大野木市兵衛	前付			○
4	合類絵抄 万宝御成敗式目	正徳3	1713	大坂 吉文字屋市兵衛	頭書	○	○	○
5	新版改正万宝絵入増益頭書 永代用文章大成	正徳5※	1715	京都 荒川三郎兵衛他1書肆 ※原板は宝永4	頭書	○	○	○
6	童習教訓万福往来	享保12	1727	京都 菊屋七郎兵衛	頭書	○	○	○
7	一代書用筆林宝鑑	享保15	1730	京都 植村藤次郎、江戸 植村藤三郎、大坂 植村藤三郎	頭書	○	○	○
8	新益大成 大大節用集万字海	宝暦7	1757	京都 万屋作右衛門他5書肆	前付	○	○	○
9	新撰用文章宝玉袋	宝暦12	1762	大坂 堺屋清兵衛他1書肆	前付	○	○	○
10	女小学教艸	宝暦13	1763	大坂 敦賀屋九兵衛	前付	○	○	○
11	女庭訓御所文庫	明和4	1767	京都 菊屋七郎兵衛	前付	○	○	○
12	婦人宝箱 女用文千歳姫松	安永5	1776	江戸 西村屋与八	頭書	○	○	○
13	連玉古状揃宝蔵	安永9	1780	江戸 鶴屋喜右衛門	頭書	○	○	○
14	万代節用字林宝蔵	天明2	1782	京都 梅村市兵衛他4書肆	前付	○	○	○
15	書札往来 文林節用筆海大全	天明7	1787	江戸 須原屋茂兵衛、大坂 大野木市兵衛	頭書	○	○	○
16	新童子往来万宝大全	寛政4	1792	大坂 敦賀屋九兵衛他2書肆	本文	○	○	○
17	女今川状百人一首女手習状 女教小倉色紙	寛政5	1793	江戸 須原屋伊八	前付	○	○	○
18	万海用文無尽宝蔵	寛政6※	1794	京都「」※原板は天明2	前付	○	○	○
19	頭書絵入 源氏名寄文章	寛政7	1795	江戸 花屋久治郎	口絵			
20	女国つくし	寛政12	1800	江戸 吉文(吉田屋文三郎)	頭書	○	○	○
21	名物往来文宝蔵	江戸中期		江戸 村田治郎兵衛	前付	○		
22	御家直第・玄海堂書 連玉用文筆法蔵	江戸中期		一・明和7版か	頭書	○	○	○

近江八景詩歌の伝播と受容（鍛冶）

23	大勇古状揃	文化3	1806	江戸 鶴屋喜右衛門	頭書	○		○
24	錦葉百人一首女宝大全	文化8	1811	大坂 柏原屋清右衛門他1書肆、京都 菊屋喜兵衛他2書肆、尾張 永樂屋東四郎、江戸 葛屋重三郎	後付	○		○
25	錦森百人一首万寿鑑	文化14	1817	江戸 森屋治兵衛	附録	○		○
26	御家 諸状用文章	文政13	1830	江戸 西村宗七他2書肆	頭書	○		○
27	永代節用無尽蔵	天保2	1831	江戸 須原屋茂兵衛、京都 風月莊左衛門他9書肆	前付	○		○
28	鬼女重宝 源氏物語絵尽大意抄	天保8	1837	江戸 和泉屋市兵衛	口絵	○		○
29	百人一首女訓抄	嘉永1	1848	江戸 須原屋茂兵衛他3書肆、伊勢 山形屋伝右衛門、京都 吉野屋仁兵衛、名古屋 永樂屋東四郎他2書肆、大坂 河内屋喜兵衛	前付	○		○
30	改正新版 初学古状揃万宝蔵	嘉永1	1848	江戸 山城屋佐兵衛	頭書	○		○
31	春玉百人一首姫文庫	嘉永4	1851	江戸 山本平吉	前付	○		○
32	頭書 女大学玉文庫	嘉永4	1851	大阪 播磨屋理助、江戸 山崎屋清七他2書肆	頭書	○		○
33	嘉永改正 童子早学問	嘉永4	1851	江戸 山本平吉	頭書	○		○
34	新撰大全 童子往来百家通	嘉永5※	1852	江戸 須原屋茂兵衛、京都 銭屋惣四郎、大坂 敦賀屋九兵衛他3書肆 ※原板は天保8	本文	○		○
35	安政用文章	安政4	1857	江戸 井上葦月蔵板	頭書	○		○
36	江戸大節用海内蔵	文久3	1863	江戸 須原屋茂兵衛他9書肆、京都 出雲寺文治郎他1書肆、大坂 河内屋喜兵衛他3書肆、名古屋 永樂屋東四郎	頭書	○		○
37	錦森新版 豊泰商売往来	元治2	1865	江戸 森屋治兵衛	頭書	○		○
38	皇國女用文宝箱	明治1	1868	東京 若林喜兵衛	頭書	○		○
39	頭書挿入 楠正成教訓之書	未詳			頭書	○		○
40	永操百人一首	未詳			前付	○		○
41	女年中文案詞	未詳			頭書	○		○
42	紅葉百人一首姫鏡	未詳		江戸 和泉屋市兵衛	頭書	○		○
43	今様百人一首吾妻錦	未詳			後付	○		○
44	文武宝林古状大成	未詳		名古屋 永樂屋東四郎	頭書	○		○
45	海内一般女童用文章	未詳		江戸 須原屋茂兵衛	頭書	○		○

の広がりを知ることができる。こうした、直接近江八景を主題とする書物以外にも、近江八景という知識の普及に大きな役割を果たしたものとして、日用教養書の附録記事にあらわれる近江八景関係記事に注目する。

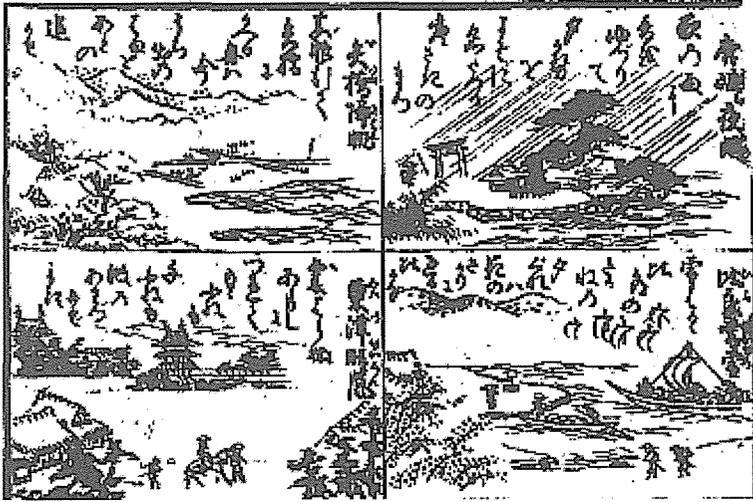
表は、各種目録や往来物の先行研究を参考にしながらみいだした近江八景の記事を載せる日用教養書のうち、筆者が現物、または写真版や画像を確認することができたものの一覽である。ただし同じ書名で何度も刊行されたものは一点しか名前を挙げていない。例えば15番『書札往来 文林節用筆海大全』は、享保二年(一七一七)に江戸の須原茂兵衛と大坂の大野木市兵衛から初板が発行され、その後、享保四年、同一八年、延享四年(一七四七)、宝暦一年(一七六一)、天明七年(一七八七)、寛政一年(一七九九)、文政元年(一八一八)と後刷、かぶせほり、改刻が繰り返された往来物であり、そのうち天明七年以降の三板の前付に、「近江八景詩歌」に関する記事が掲載されている。また38番『皇国女用文宝箱』と45番『海内一般女童用文章』は、内容を全く同じくする改題本である。このように日用教養書は記事の増補なども伴いながら、何度も再刊されるのが普通であり、その意味でも本表以上に、近江八景詩歌の記事を載せる日用教養書が出板されたことは確実であり、本表はおおよその概要を示すものとなる。

表では、当該書の題名(主に外題によった)、刊行年、西暦、板元、近江八景の記事が載る箇所、近江八景歌、近江八景詩、近江八景図の記載の有無に関して項目を設けている。和歌と漢詩は、すべて信尹の歌であり、宗樸の詩であった。

元禄五年(一六九二)に大坂の灰屋孫兵衛・本屋又兵衛、江戸の本屋清兵衛が刊行した重宝記『万民調宝記』を初出として、以下、明治初年に至るまで、節用集や往来物、女性用往来物など、さまざまな日用教養書に近江八景詩歌が掲載されていることが、一見してうかがえるであろう。全体的にみれば、近江八景歌はいくつかの例外を除いてほぼすべての記事に付随しており、近江八景詩も和歌ほどの頻度ではないが、継続して現れていることがわかる。

出版書肆に注目してみると、須原屋茂兵衛のように複数回、名前がみえるものもいるが、活動拠点も時期も異なる書肆の名前が並んでいることがみてとれる。恐らくは、江戸時代中後期を通して、先行書からの無断引用により、近江八景詩

図1 『連玉古状揃宝蔵』



(筑波大学附属図書館乙竹文庫)

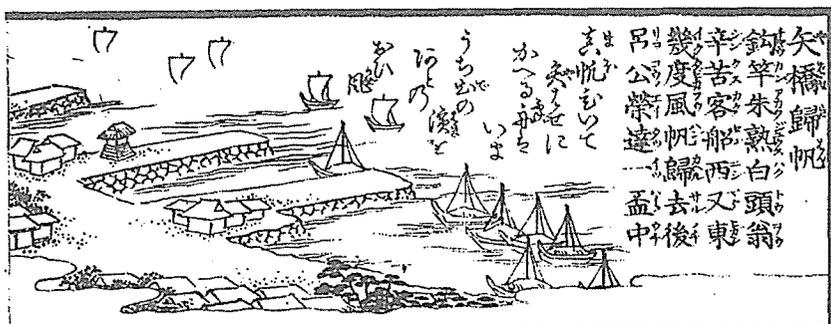
歌の記事は多くの日用教養書に繰り返し掲載されたのであろう。

例えば、13番『連玉古状揃宝蔵』は、「今川状」「義経腰越状」など歴史上の有名人の手紙を集め、最も流布した往来物の一つとして知られる古状揃系の往来物だが、その本文以外に、前付に「土農工商図」「近江八景歌」「和俗制作の文字」「伊勢斎宮忌詞」といった記事が、頭書部分にも「江戸名所往来」「五性名乗字」「人相手指南」「外国名集」といった記事が載っている。附録記事には本文の内容とは関係なく、儒教道徳や地理情報、陰陽道に関する記事などが掲載されている。つまり江戸時代の読者が身につけるべき日用教養知識の一つとして、近江八景に関する記事も掲載されているのである。

1番『万民調宝記』について、同書掲載の瀟湘八景図が、前年刊行の『鳴羽搔』掲載の瀟湘八景図と酷似していることを、堀川貴司氏が指摘しているが、近江八景図についても同様の指摘ができる。異本と校訂の上、異文についてはその情報を記すなど、学術的な姿勢が高い『鳴羽搔』掲載の知が、より一般向けの『万民調宝記』に流用され、さらに各書に広がっていく構図が読み取れる。

日用教養書に流れる知識の性質を考える上で、注目すべき事例

図2 『江戸大節用海内蔵』



(『節用集大系』第57巻)

図3 『一代書用筆林宝鑑』



(『稀観往來物集成』第17巻)

をいくつかあげる。

13番の往来物『連玉古状揃宝蔵』では、矢橋帰帆に雪景色の山並みの挿絵を、比良暮雪に舟が帰港する場面を描く挿絵を付けており、明らかに両者の挿絵を付け間違えている(図1)。

9番『新撰用文章宝玉袋』、30番『改正新版初学古状揃万宝蔵』、36番『江戸大節用海内蔵』では、矢橋帰帆の漢詩一句目を、本来は「釣竿手熟白頭翁」としなければいけないところを「釣竿朱熟白頭翁」としており、『改正新版初学古状揃万宝蔵』や『江戸大節用海内蔵』では、さらに「朱」に対して「アカク」という振り仮名までふっている(図2)。しかし宗樸の矢橋帰帆の詩は四句目が「呂公榮達一盃中」とあるように、呂公こと太公望のことを詠んだ詩であり、「釣竿朱熟」の「白頭翁」では意味が全く通じな

くなる。

江戸時代中期、教訓書や節用集や往来物といった日用教養書類の作者として多くの著作を残した中村三近子³⁹⁾による消息手本を集めた往来物である7番『一代書用筆林宝鑑』では、例えば石山秋月の詩が「古木回岸寒月影吟残葉々霧中花」とあるように、すべての詠題において本来の詩の下二句のみを載せたものとなっている（図3）。逆に8番の節用集『大節用集万字海』のように、上二句のみを載せているものもある。

日用教養書の附録記事は、このように誤謬や不完全な情報を伴うことも多い性質のものであり、それが日用教養書を通じて伝播する知の、ひいては江戸時代の書物文化に広がる知の特徴の一つといえる。しかし誤謬を伴いながらの伝播ではあるが、その伝播の射程が格段に広がる可能性を持つのも日用教養書の性質であったのである。

四 日用教養書の伝播

近江八景の記事を載せる日用教養書は、琵琶湖に近い京都や大坂の上方書肆のみならず、江戸や名古屋の書肆も刊行していた。そして、一度、冊子という形を取って世にでた書物は、当然、刊行地のみならず、さまざまな人の手を渡って、日本各地に移動していく。また地域という横の広がりだけでなく、一つの家のなかで親から子へ、または、所有者が変わりながら、時を越えて、世代を越えて伝えられていくという縦の広がりもあって、書物の知は伝播していく。

例えば、前節で間違った挿絵が付されている事例として指摘した13番『連玉古状揃宝蔵』は、安永九年（一七八〇）に江戸の書肆鶴屋喜右衛門が刊行した往来物であるが、筑波大学附属図書館乙竹文庫所蔵本の裏見返しには、「南魚沼郡虫野村桑原孫右衛門」と所蔵者の名前が記されており、越後国中部の農村で使用されていた本であることがわかる。また39番『頭書絵入楠正成教訓之書』は江戸後期の刊行と目される往来物だが、佛教大学図書館所蔵本には、「上州一穀屋一原市」という蔵書印が捺してある。上野国碓氷郡原市村（現群馬県安中市大字原市）は中山道沿いの間の宿であるが、天保一

三年（一八四二）作成の家並絵図に、穀物商として、喜右衛門、百姓増五郎、百姓与吉、三之助店角次郎といった名前を
確認でき、^①このような在郷町で農間余業を行う百姓が使っていた書物であることが想定できる。また7番『一代書用筆林
宝鑑』は、隠岐の長者として有名な村上助九郎が天保五年（一八三四）に上京した折に京都にて購入した本の一つとして
その蔵書録に名前が載っている。^②徳永結美氏は、3番『女源氏教訓鑑』の書誌調査を行い、同書は正徳三年（一七二三）
の初板刊行以降、享保二年（一七一七）、同五年、同六年、元文元年（一七三六）、寛政八年（一七九六）と計六種類の板が
存在していること、改訂に伴い内容に変化も加えられているが、近江八景の記事はすべての板に掲載されていること、現
存する本のなかには信州の貸本屋と思われる印記を持つものも存在することなどを指摘している。^③これらの事例から、近
江からも、また本の刊行地からも遠く離れた越後国や上野国、信濃国、隠岐国の農村や宿場町に、蔵書として、さらには
貸本屋なども介在して、これらの本が伝播していたことがわかる。

五 手習教育におけるテキスト化

日用教養書に掲載される知は書物のなかにとどまらず、さらに広く伝播する可能性を持つ。それが手習教育における伝
播である。江戸時代中後期、手習教育が地域差も含みながら各地に浸透していくことはよく知られていることだが、日用
教養書の所有者はそのような手習教育を実践する教育者の側であることも多かった。手習師匠たちは、手習いの現場で自
ら作成した写本を手本に使っていたのだが、そうした手習いの場で、近江八景詩歌が手習教育のテキストとして使われて
いる事例もみいだすことができる。

近江八景詩を詠んだ玉質宗樸が謫居していた近江国蒲生郡中小森村にもほど近い、小谷村（現滋賀県蒲生郡日野町）の村
役人も勤めていた近江商人吉村儀兵衛家には、享保一六年（一七三一）に吉村吉次郎が筆写した「近江八景」と題する写
本が存在する。^④その内容は、玉質宗樸の近江八景詩と、近衛信尹の近江八景歌を稚拙な字で筆写したものである。

また武蔵国比企郡宮前村（現埼玉県川島町）において村役人が輩出した鈴木家にも、近江八景詩歌を書き留めた折本仕立ての手本が残されている。^⑧ 奥書から、これは杉辺水谷（忠貞）という人物が文久三年（一八六三）に書いたものとわかるが、杉辺は川越藩の藩士であり、往来物の著作もある書道家である。鈴木家には、杉辺が文久四年（一八六四）、鈴木孝太郎（鈴木家九代目庸行）に筆道の秘伝を伝授した史料^⑨も残されており、杉辺は鈴木家の書道の師匠であったことがわかる。鈴木孝太郎は、宮前村で安政四年（一八五七）より手習所を開いており、^⑩鈴木の手習所において、手習い上級者に対して、杉辺から与えられたこの折本仕立ての手本を教材として使っていた可能性が想定できる。

さらに江戸後期、三河国宝飯郡御馬村（現愛知県豊川市御津町）の手習所桃廼舎の筆子が、七夕祭の際に短冊に認めた詩歌などを書き留めた史料にも、慶応三年（一八六七）、同四年、明治三年（一八七〇）の分に、近江八景の石山秋月と堅田落雁を詠んだ、宗樸詩の上二句と信尹歌の上の句が書き留められている。^⑪ この近江八景詩歌は、秋の月と冬の雁を詠んだものであり七夕とは全く関係がない。桃廼舎における七夕行事については別稿で検討する予定であるが、桃廼舎で書かれた七夕短冊には、日用教養書の附録記事としては近江八景以上に頻出する七夕の記事のなかにみられる、江戸時代前期の後水尾院サロンの公家たちが詠んだ和歌などが書き留められている。桃廼舎の手習師匠石黒鎮周^{やぶら}は、日用教養書の附録記事をもとに短冊に書く詩歌を選んでいとと推定され、そのなかで七夕記事と同じく附録記事に載る近江八景詩歌も短冊の題材に選ばれたのであろう。

また原本の書写年代は不明だが、乙竹岩造氏は甲斐国八代郡田中村（現山梨県笛吹市二宮町田中）三井清氏蔵書より長谷川妙鉢の女筆手本『近江八景』の写本を書写している。^⑫ さらに上野国利根郡下久屋村（現群馬県沼田市下久屋町）の倉品石近家文書にも、『庭訓往来』や『商売往来』などの刊本往来物や手習写本とともに、近江八景の手本が残されている。^⑬

このように近江国のみならず、幅広い地域で近江八景が手習教育の手本として利用された事例を確認できる。近江八景に関する手本は、手習いの教材としては決して普遍的にみられる題材ではないが、日用教養書附録に掲載された記事が、

手習教育に利用される可能性を示す事例として注目できよう。刊本往来物に掲載された記事は、知識としてその所有者が受容するだけでなく、手習いのテキストとして、手習いの子供たちにも伝播するという可能性を持ち得たのである。

以上、みてきたように、江戸時代前期の朝廷文化サロン、五山文化サロンにて誕生した近衛信尹の近江八景歌と玉質宗樸の近江八景詩は、堂上・地下歌壇における写本歌書としての流布、刊本詩歌集『扶桑名勝詩集』への掲載、各種メディア、さらには日用教養書での伝播と段階的に伝播の範囲を広めていき、書物の時代としての江戸時代を生きる人々の一般教養として、定着していったのである。

- ① 横田冬彦「益軒本の読者」(横山俊夫編「貞原益軒」平凡社、一九五五年)。
- ② 柳沢美英子「若狭浦方の手習資料」(「福井県文書館研究紀要」第四号、福井県文書館、二〇〇七年)。
- ③ 「覚」(「福井県立文書館所蔵桜井市兵衛家文書(三四九号)」)。
- ④ 「天満宮御文庫書籍寄進帳」(川添昭二・棚町知彌・島津忠夫編「太宰府天満宮運歌史」第四卷、太宰府顕彰会、一九八七年)四七六頁。
- ⑤ 「松屋藏書目録」卷之四「早稲田大学図書館(イ〇二/〇二三〇九)」。
- ⑥ 「宝貨記」(築瀬一雄「本居宣長とその門流」第一卷、和泉書院、一九八二年)一八一頁。
- ⑦ 「兵庫名所記」卷下(兵庫津磯之町 菊屋新右衛門)《早稲田大学図書館(ル〇四/〇一七五七)》。
- ⑧ 「風俗文選」卷四《国文学研究資料館(十三一四〇—三)》。
- ⑨ 「近江輿地志略」卷之五(小島捨市校註・宇野健一改訂校註)「新註近江輿地志略」弘文堂書店、一九七六年)五三—五五六頁。
- ⑩ 「倭漢名教」(村上平楽寺刊)《国立国会図書館所蔵龟田文庫(〇三一・五/Ka一八三w/m)》同館インターネットサイト「国立国会図書館デジタル化資料」(以下、同館サイト)参照。
- ⑪ 「新編 増補和漢名教」卷上(洛陽 佐野与兵衛刊)《国立国会図書館所蔵龟田文庫(〇三一・五/Ka一八三w)》同館サイト参照。
- ⑫ 鈴木重三「名教風景」(鈴木「広重」日本経済新聞社、一九七〇年)。
- ⑬ 前掲はじめに注④「近江八景」一—二、一三三頁。
- ⑭ 「里内勝治郎と里内文庫」栗東歴史民俗博物館、二〇〇五年 九〇—九三頁。
- ⑮ 「詩近江八景義太夫番付」(早稲田大学演劇博物館(二二四/八九/一九)・同館ホームページ「デジタル・アーカイブ・コレクション」参照)。
- ⑯ 「詩近江八景」(早稲田大学演劇博物館(二二〇/一〇六八)・同館ホームページ「浄瑠璃本画像データベース」参照)。
- ⑰ 益井邦夫「琵琶湖八景」青花磁の由来解明考」(「国学院雑誌」第九一巻第六号、国学院大学広報部、一九九〇年)。河原正彦「青花琵琶湖八景図敷瓦」について」(宇野茂樹編「近江の美術と民俗」思文閣出版、一九九四年)。
- ⑱ 恭王府博物館ホームページ「資料庫」参照。
- ⑲ 高尾一彦「近江八景落穂集」(高尾「横笛と大首絵」法政大学出版

- 局、一九八九年 初出一九八二年。前掲ははじめに注③青柳「十七・十八世紀における近江八景の展開」。
- ⑳ 『近江八景』（京都 岡本半七、江戸 小川彦九郎刊）（『往来物大系』第六一巻、大空社、一九九三年）。
- ㉑ 『さしもくさ』（大坂 河内屋喜兵衛刊）（小泉吉永編『江戸時代女性文庫』補遺七、大空社、二〇〇〇年）。
- ㉒ 『万宝字尽 女用続文登』（京都 菊屋安兵衛・伏見屋半三郎再刊）（小泉吉永編『稀観往来物集成』第二巻、大空社、一九九七年）。
- ㉓ 『長雄 近江八景并文書』（栗東歴史民俗博物館所蔵里内文庫（三九六／一六／I））。
- ㉔ 『世話 千字文并八景詩歌』（栗東歴史民俗博物館所蔵里内文庫（三九六／二／I））。
- ㉕ 各資料の典拠を番号順に記す。
- 1 長友千代治編『重宝記資料集成』第三巻、臨川書店、二〇〇五年
 2 筑波大学附属図書館乙竹文庫（以下、筑大乙竹）（ル一八五／八三八）・同館ホームページ参照（以下、同館所蔵史料はすべて同じ）
 3 『江戸時代女性文庫』第一巻、大空社、一九九四年 4 『往来物大系』第七八巻、大空社、一九九四年 5 小泉吉永編『稀観往来物集成』第一五巻、大空社、一九九七年 6 東京学芸大学附属図書館所蔵日本近代教育史資料（以下、東学大近代）（T-AO／八一／一六）・同館ホームページ『東京学芸大学リポジトリ』参照（以下、同館所蔵史料はすべて同じ） 7 小泉吉永編『稀観往来物集成』第一七巻、大空社、一九九七年 8 東京都立中央図書館（和三三九） 9 『絵図集成近世子どもの世界』絵図編第六巻、大空社、一九九五年 10 東学大近代（T-AO／二六／一三三） 11 『往来物大系』第九一巻、大空社、一九九四年 12 石川県立歴史博物館所蔵大鑑文庫（二一八／七七二／三七〇、九二一／三） 13 筑大乙竹（ル一八五／五〇一）
- ① 国際日本文化研究センター図書館海野文庫（KF／三／A）
 ② 金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵村松文庫（二一、八／三）
 ③ 東学大近代（T-AO／八一／一九） 17 東学大近代（T-AO／八三／一九） 18 富山市立図書館翁久允文庫（三七五／マ）
 19 『往来物大系』第七八巻、大空社、一九九四年 20 東京学芸大学附属図書館望月文庫（以下、東学大望月）（T-AO／二三／一） 21 国文学研究資料館（ヤ五／一四） 22 東学大近代（T-AO／七四／一三七） 23 東学大近代（T-AO／三三／七五） 24 『往来物大系』第九五巻、大空社、一九九四年 25 東学大望月（T-AO／一四／一五） 26 玉川大学図書館（WA一六一） 27 佛教大学図書館（圖書／二五〇） 28 国文学研究資料館所蔵初雁文庫（二／五八八） 29 国文学研究資料館（タ／五九） 30 早稲田大学図書館九曜文庫（文庫三〇／g〇三二五） 31 国立国会図書館（二四一五二） 32 東学大望月（T-AO／二六／二九） 33 筑大乙竹（ル一八五／七二六） 34 東学大望月（T-AO／八一／二二） 35 国立公文書館内閣文庫（二〇四一〇三三三） 36 『節用集大系』第五七巻、大空社、一九九四年 37 東学大望月（T-AO／六三／九四） 38 東学大望月（T-AO／七五／五） 39 佛教大学図書館（圖書／二六四） 40 玉川大学図書館（WA〇五一） 41 玉川大学図書館（WA一六一） 42 東学大望月（T-AO／一四／二六） 43 東学大近代（T-AO／八三／一七） 44 東学大望月（T-AO／三三／三六） 45 東学大望月（T-AO／七五／三）。
- ②⑥ 石川謙・石川松太郎編『日本教科書大系 往来編』別巻二、講談社、一九七七年。江森一郎監修『江戸時代女性生活絵図大事典』第五巻、大空社、一九九三年。『絵図集成近世子どもの世界』絵図編第六巻、大空社、一九九五年。小泉吉永編『往来物解題辞典』大空社、二〇〇一年。

- ②7 小泉吉永「新発見の往来物 NEW〇六八」（同氏ホームページ「往来物倶楽部」）。
- ②8 若杉哲男「文林節用筆海往来をめぐって」（山田忠雄編『国語史学』の為に）第一部、笠間書院、一九八六年。
- ②9 前掲はじめに注②堀川著書 一七四頁。
- ③0 山本ゆかり「往来物をめぐって」（山本「上方風俗画の研究」藝華書院、二〇一〇年 初出二〇〇七年）。
- ③1 「天保十三寅年十月書上安中宿江差出候写村札」（安中市市史刊行委員会編『安中市史』第五卷別冊付録、安中市、二〇〇二年）。
- ③2 「蔵書簿」（『島根県隠岐郡海士町所蔵村上家文書（一二七二号）』）。
- ③3 徳永結美「女源氏教訓鑑」考」（『学芸古典文学』第二号、東京学芸大学国語科古典文学研究室、二〇〇九年）。
- ③4 上村雅洋「近江商人吉村儀兵衛家と酒造業」（安藤精一・高嶋雅明・天野雅敏編『近世近代の歴史と社会』清文堂出版、二〇〇九年）。
- ③5 「近江八景」（日野町史編さん委員会編『近江日野の歴史』第三巻付録CD-ROM、滋賀県日野町、二〇一三年）。
- ③6 「御手本」（『埼玉県立文書館所蔵鈴木（庸）家文書（一〇五六七号）』）。
- ③7 「子繪帳」（『嘉永五年（一八五二）（川越市総務部市史編纂室編『川越市史史料編近世Ⅰ』川越市、一九七八年）六二五頁』）。
- ③8 「女今川姫鑑」（『刊年未詳』『埼玉県立文書館所蔵猪鼻家文書（二六八三号）』）。
- ③9 「筆執心得法」（『埼玉県立文書館所蔵鈴木（庸）家文書（一〇〇一一号）』）。
- ④0 「川島町教育史」川島町・川島町教育委員会、一九七八年 三七―三八頁。工藤航平「幕末期江戸周辺における地域文化の自立」（『関東近世史研究』第六五号、関東近世史研究会、二〇〇八年）。
- ④1 吉永昭「寺子屋の普及」（吉永『愛知県の教育史』思文閣出版、一九八三年）。
- ④2 「筆子織女祭歌人数帳」（『豊川市教育委員会所蔵石黒泰家文書』）。
- ④3 「近江八景往来」（『筑大乙竹（ル）一八五―一〇七二』）。
- ④4 「群馬県立文書館収蔵文書目録』第一集、群馬県立文書館、一九八三年 一四八頁。

おわりに

以上、本稿では近江八景詩歌の江戸時代書物文化における展開を明らかにした。日本全国の名所を番付形式で紹介する見立番付『日本名所旧跡教望』では、富士山や松嶋が東の大関に位付けされるなか、西の大関に琵琶湖が、そして別格の勸進元として近江八景の名前が番付の一番中心に大書されている。^①近江八景という知の教養化が進展し、まさに日本を代表する名所の一つとなったといえよう。こうした名所としての近江八景に古典的イメージを付与し、名所としての格付けをあげる役割を担ったのが近江八景詩歌といえよう。

京都、また東海道からの距離の近さは、知を発信する側が近江八景を再認識する機会を増やし、近江八景という知識をさまざまなメディアで絶え間なく発信していくことに繋がったと想定される。

青柳周一氏が鮮やかに明らかにしたように、近江八景という知識の定着は、近江湖南地域の名所化、すなわち、「観光地」化を進展させ、大量の旅行者を恒常的に受け入れる観光業の発展など地域社会の変容をもたらした。^②そして三章で明らかにしたように近江八景に関する知を含んだ書物は、日本各地に伝えられており、手習教育での使用もみられた。実際に近江へ旅行するという行動を示さない人びとにもその知は及んでいたと想定され、日本各地における八景の選定という試みにも影響を与えることになる。例えば、安芸国賀茂郡川尻村（現広島県呉市川尻町）の村役人が、「芸藩通志」選定のために文政二年（一八一九）に広島藩に提出した書上に、次の一節がある。

蒲刈地の船を見ては矢橋の帰帆を感じ、猫迫門渡る霧瀬田の橋を夢中に見る心地して、野路山威音城の洪鐘を幽に聞ては三井の哄鐘を思ひ、夕日には仁方村白嶽山を善悪山に見越、夜に至れば石山の月を慕ひ、遠き琵琶湖を心に移し

信尹が瀟湘八景に準えて和歌を詠み、宗樸が我が身を白楽天に準えながら漢詩を吟じたように、川尻村の人々は「遠き琵琶湖」に憧憬を抱きながら、近江八景に準えて自らの地域に名勝をみいだしているのである。

そして本稿では、近江八景の伝播は、このような文人層のみに留まらず、さらに広い階層をもその射程に持っていたことを明らかにした。『扶桑名勝詩集』を蔵書する事例として紹介した江戸後期の国学者小山田与清は、その著書「松屋筆記」^④において、近江八景選定者に関して、『扶桑名勝詩集』や貝原益軒『和漢名数』、『近江名所図会』、『吾妻紀行』、『国花万葉記』、『閑田耕筆』、『遠碧軒随筆』といった諸書を引用しながら複数の選定者説を紹介している。しかしこのような一つの書物の知を盲信せずに、複数の書物を集めて比較検討するような行為は、小山田のような考証学者だからこそなした技であり、近江八景詩歌の伝播の先にいる多くの読者は、自分が受け取った書物に書かれた内容を、知識として受容していくことになるであろう。その受容の様相については本稿では十分な検討を加えることはできない。今後の課題とし

たい。

日用教養書という書物の先の伝播を示す史料である手習いの教本は、筆で書かれた写本史料である。江戸時代の村の蔵書を調査していると、刊本とともに写本がでてくることも非常に多い。その写本群のなかには、刊本という形では流布しえない実録などが含まれることもあるが、刊本の内容をそのまま筆写したり、抄出したりしたものも多く含まれる。そしてこうした写本は所有者だけの知として蓄えられるわけではなく、貸借や更なる書写行為を通じて、所有者の周辺にも伝えられることになる。^⑤ 写本は刊本の知をさらに伝播させるという役割も持っており、そして、それは決して村の蔵書にのみいえることでもない。

一章にて、「黔驢集」掲載の近江八景詩が写本歌書のなかで伝播していたことを指摘したが、上述したように源豊資編「数量和歌集」では、『扶桑名勝詩集』が校訂本として使われていた。この歌集は、奥書に「不可許他見」と記されており、一般的な流通を想定しない、秘伝的な知の書物として作成された写本であるが、そこにもこうした刊本の知が流れ込んでいるのである。また公家の勸修寺家には、刊本『鳴羽搔』の写本が存在している。^⑥ 閉じた知であることを標ぼうする地下歌人の写本歌書や、閉じた知の世界の代表である公家の蔵書にも刊本知が流れ込んでいる。江戸時代の書物文化を総体的に捉える際には、知を創造する側面だけではなく、それを受容する側面にも目をむけ、こうした刊本知をさらに伝える回路としての役割を持つ写本も含めて、書物文化を捉えることが求められよう。

以上、本稿では近江八景詩歌という対象に視点を限定して、江戸時代の書物文化における知の流通構造を検討してきた。七夕や百人一首の事例からもわかるように、決してこうしたありようは、近江八景のみにとどまるものではない。書物の時代である江戸時代は、刊本や写本といった回路を通じて、さまざまな知識が、社会に浸透して、教養が形成されていった時代といえる。言語と出版文化の共有を通じ、一つの集団的なアイデンティティが形成されることで国民国家が形成されるというベネディクト・アンダーソンの説^⑦はよく知られているが、まさにそのような知的環境が形成されていったのが

江戸時代中後期の社会といえよう。本稿では、このような朝廷やその周辺で産み出された知が、社会一般に広範囲に伝播する知の流通構造を明らかにしたわけだが、今後は、そのような知がいかなる形で受容されるのか、という点を検討することを約して、筆を置きたい。

- ① 「番付集」所収『日本名所旧跡数望』（関西大学図書館長澤文庫（L二三／〇〇〇／六一七六））。
- ② 前掲はじめに注③青柳論文。
- ③ 「国郡誌御用ニ付書上」（川尻町誌編さん委員会・呉市中編さん委員会編『川尻町誌 資料編』呉市役所、二〇〇七年）六九～七〇頁。
- ④ 「松屋筆記」巻十二（『松屋筆記』第一巻、国書刊行会、一九〇八年）
- ⑤ 小林文雄「近世後期における「蔵書の家」の社会的機能について」（『歴史』第七六輯、東北史学会、一九九一年）。
- ⑥ 「鳴羽搔」（京都大学総合博物館所蔵勅修寺家文書（一九九四号））。
- ⑦ ベネディクト・アンダーソン（白石隆・白石さや訳）『増補 想像の共同体』N T T出版、一九九七年 初出、一九八三年。

〔付記〕 本稿は二〇一一年一月九日に日本史研究会近世史部会にて行った報告、及び二〇一二年一月二十八日に「書物・出版と社会変容」研究会にて行った報告をもとにしたものである。当日貴重な意見を賜った皆様に謝意を表す。なお本稿校正中に、吉田四郎右衛門が著書出版に関与した公家滋野井公麗について、「公事根源鈔階梯」の自筆板下の存在を武井和人氏が指摘していることをしった〔武井和人「公事根源鈔階梯放」（武井『中世古典籍学序説』和泉書院、二〇〇九年）初出二〇〇二年〕。あわせて参照いただきたい。

（京都大学文学書館研究支援推進員）

A Study on the Diffusion and Reception
of Chinese and Japanese Poetry
of the “Eight Views of Ōmi”

by

KAJI Kosuke

In the Edo period, knowledge about the “Eight Views of Ōmi” 近江八景 (*Ōmi hakkei*) spread through society by way of written works in the form of manuscripts and printed books. Such information was received by people of various regions and social strata became common knowledge. In this article I clarify the process of the diffusion of the “Eight Views of Ōmi” as a topic of Chinese and Japanese poetry. The “Eight Views of Ōmi” refers to eight beautiful scenes near southern Lake Biwa, “The autumn moon at Ishiyama temple” 石山秋月, “Evening glow at Seta” 瀬田夕照, “The weather clearing at Awazu” 粟津晴嵐, “Returning sails at Yabase” 矢橋帰帆, “The evening bell at Mii temple” 三井晚鐘, “Night rain at Karasaki” 唐崎夜雨, “Geese descending at Katata” 堅田落雁, “Snow on Mt. Hira at sunset” 比良暮雪, that were based on the “Eight Views of the Xiao and Xiang Rivers” 瀟湘八景 in China.

In the early 17th century, the court noble Nobutada Konoe 近衛信尹, who was a central figure of the imperial court salon, composed Japanese poetry on the “Eight Views of Ōmi,” and in the mid-17th century, a Zen Buddhist monk Gyokushitu Sōboku 玉質宗樸, who played an active part in the literary circles of the Five Mountains 五山, composed Chinese poetry on the “Eight Views of Ōmi.” This Chinese and Japanese poetry circulated in manuscript form not only in aristocratic poetry circles 堂上歌壇 but also in non-aristocratic poetry circles 地下歌壇 as exemplars that poets should consult.

Then, in the second half of the 17th century, this poetry was recorded in the *Fusō meisho shishū* 扶桑名勝詩集 of Shirōemon Yoshida 吉田四郎右衛門, a publisher in Kyoto, and the range of diffusion was greatly extended. In addition to publishing, Yoshida also served among a lower-ranking group of officials serving the imperial court who were called *in zōshiki* 院雜色, and his publishing was closely related to the court nobles. In other words,

Shiroemon Yoshida played a role in creating a circuit that extended imperial court culture into society.

I have been able to confirm that the *Fusō meisho shishū* was found in the libraries of cultured people and scholars in various regions, but even more significant is the fact there exist many examples of the works of writers of other genres that quote the Chinese and Japanese poetry found in the *Fusō meisho shishū*. In this way, this Chinese and Japanese poetry on the “Eight Views of Ōmi” spread through the world of printed books, and this can be confirmed by their appearance as topics in gazetteers and novels, and various other publications including ukiyoe prints, and by the fact that they appeared in entertainments such as kabuki or jōruri and other genres including crafts and clothing. In addition, after the 18th century, articles about this poetry began to appear in books that conveyed basic knowledge and culture necessary for everyday life, such as *orai-mono* 往来物 (epistolary textbooks) and the *Setsuyoshū* 節用集 (a Japanese-language dictionary), and they were also used as exemplars in teaching materials at private elementary schools in various parts of Japan.

Through the above examination, I have drawn an intellectual map of the structure and circulation of Edo-period book culture that extended from the top levels of the imperial court down to the lowest ranks of children doing writing practice.

I have been able to point out various trends that influenced the “Eight Views of Ōmi” becoming common knowledge among many Japanese people. As an example, the southern part of Lake Biwa in Ōmi became a sightseeing spot as a result of the increasing number of tourists who sought to see the “Eight Views of Ōmi” and, in addition, inspired by admiration of Ōmi, cultured persons in other regions discovered new versions of the eight views in their own regions.